

流れ星

名も知らぬ鳥が

眼の前に現れて消えた

ただ一言

不可解な星の名を告げて

私のからだはその言葉の毒に打たれて

一瞬 心臓はびたりと止まった

私の体内をよぎる流れ星

言葉が言葉を生んで言葉を殺した

果てしなく巨大な疑問符を残して

もみじ

私は何度書いて何度焼き捨てただろう

死んだ言葉が薶^{ひし}めきあっていても

生きた言葉は見つからない

私は紅葉^{もみじ}散る秋の山峡に

心重く足を向けた

かつてその言葉をその下に埋めた

楓^{かえで}の木の根もとに

その言葉はもう熟しただろうか

甘いワインのように

あるいは

にがいビールのように

革命風使

南蛮ノと

帝国帝都の人民が

あなど
侮り軽んず

辺境の地から吹く風が

帝国帝都の人民に

革命への愛を告げた

帝国を撃ち滅ぼす

蜂起を告げ知らせる合言葉は

花言葉

花言葉は花の名

花の名は黒ユリ

蜂起の秋とき

この合言葉を知らぬ

帝国帝都の人民は

革命の敵として殺されよう

南方辺境の風使は

そう告げて立ち去った

海と少年

少年は砂浜を疾駆した

頬を流れる涙をふり払うかのように

少年は白い砂浜を駆け抜けた

真夏の太陽の強烈な光線で

褐色のしなやかな裸体を

焼きつくそうとするかのように

少年は長い浜辺を走った

母の名を呼び

海に生まれ

海に生き

海を愛し

海に遊び

海に死んだ

母の匂いを求めて

少年は海に向かって疾駆した

鉄片が磁石に吸い寄せられるように

少年は果てしない海原うなばらに向かって駆け抜けた

潮騒しおさいに母の誘う声いさなを聞いたかのように

少年は母の胸のような海に向かって走った

海に幸さいちありと

母のその言葉に憑かれたかのように

旅人

住みなれた故郷をあとに
君はどこへと旅に出る
愛する妻子を残して
君はなにを求めて旅に出る
出会いなき人生の不毛に
君はいたたまれなくなったのだろうか
閉ざされた愛の世界にはない
真実^{まこと}の愛を求めようというのだろうか
だが一人旅は危険に満ちている
未知なる世界への一人旅は
無数の危険に満ちている
それでも君は旅ゆくのだろうか

若き旅人よ

君はかつて故郷の炉辺で
詩箋に詩句を書きつけては
炉中にくべて燃やした
死句^{しこ}と
君は悲しく一言つぶやいて
煙に化した詩句に咳こんだ
言葉のいのちよ、と
煙と化した詩句が目にしみ
君は涙ながらにつぶやいた
そして君は思いたったのだ
かつて村の古老にきいた
深山幽谷のシャーマン求めて
言葉にいのちの炎を燃やす
姿なきシャーマン求めて

君は旅ゆくのだろうか

若き旅人よ

霧のなかの未知の世界へと

君は踏みゆこうとするのだろうか

かつてはいたと伝えられる

シャーマンの世界へ

生きとし生ける諸霊と交わり

神世かみよと人世ひとよに生きるという

呪符と呪言と呪力の世界に

君は分け入ろうとしているのだろうか

その身を滅ぼすとも

そのいのちを奪われようとも

二度と故郷に帰れずとも

かつて

山森に生まれ

山森に育ち

山森を愛し

山森に遊び

山森に死した

太子の詩人たちは

もはや甦らないのか

木の実から詩の香りを醸かもしだし

言葉で木の香りをかきたて

山森に住む精霊と恋した

太古の詩人たちは

もはや甦らないのか

こだま

聞こえる

木々たちの啜り泣きが

聞こえる

木々たちの悲しみが

聞こえる

木々たちの呻きが

聞こえる

木々たちの苦しみが

聞こえる

木々たちの叫びが

聞こえる

木々たちの怒りが

木霊が

傷だらけの季節

傷だらけの季節よ

おまえの呻き声はあまりにも哀しい

愛する人を失った悲しみよりも哀しい

生きる望みを失い果てた

実存の脱殻よりも哀しい

傷だらけの季節よ

もはやおまえの力では

海の清らかさを失った魚たちが

陸に打ち上げられ滅びゆく

その運命を喰いとめることはできないのか

傷だらけの季節よ

もはやおまえの力では

大空のさわやかさを失った鳥たちが

地上に叩き落とされ滅びゆく

その運命を喰いとめることはできないのか

傷だらけの季節よ

もはやおまえの力では

地中の潤い^{うるお}を失った虫たちが

地表にあぶり出され滅びゆく

その運命を喰いとめることはできないのか

傷だらけの季節よ

もはやおまえの力では

飢えかつえのたうちまわる

荒れ果てたぼくらの魂に

心安まる歌を聞かせてはくれないのか

闇なのか

一寸先も闇なのか

歌はきこえてこないのか

闇をその力で切り拓く

大地の讃歌はきこえてはこないのか

ケモノ・ゲリラ

さあいつでもやってこい
ヤンキー仕込みの猟犬どもよ
おれらジャングルのケモノ・ゲリラよ
野性の血潮を失って
文明などに寝返った
おまえら如き猟犬に
発見されてたまるかい
捕まってたまるかい
おれらジャングルのケモノ・ゲリラよ
おまえら腐り鼻の猟犬どもに
正体あかしてたまるかい
おれらジャングルのケモノ・ゲリラよ

変化自在神出鬼没の

姿なき神なるケモノ・ゲリラよ

ある時は空飛ぶ小鳥

ある時は木の上の猿

ある時はとぐろ巻く蛇

ある時は水中のピラニア

ある時は疾駆するピューマ

ある時は水辺のワニ

まだまだたくさんござんすよ

ジャングルはおれらの生命

ジャングルはおれらの揺り籠かご

ジャングルはおれらの褥しとね

ジャングルはおれらの内庭

ジャングルはおれらの戦場

ジャングルはおれらの武器

巨木に被われたジャングルはおれらを生かし

精霊宿るジャングルはおれらを守る
さあいつでもやってこい

ヤンキー仕込みの猟犬どもよ
相手になってやるぜ

腐り鼻の猟犬どもよ

野性の霊力を打ち捨てて

文明に身売した裏切り者よ

おまえらなんぞに負けてたまるか

何千匹何万匹動員したって

おまえらいったんこのジャングルに入れば

生きては帰れないんだぜ

おれらの術にいったんかかれば

孤立して包囲されてゼーンメツよ

それでもいいならやってこい

ジャングル墓場にする覚悟でやってこい

キンタマくくってやってこい

昼寝して待ってるぜ

ヤンキー仕込みの猟犬どもよ

おれら必勝不敗のケモノ・ゲリラよ